



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	英単語習得の困難な生徒の支援
Author(s)	奥村, 安寿子
Citation	子ども発達臨床研究, 6, 125-129
Issue Date	2014-12-05
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.6.125
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57585
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12203623_06_125-129.pdf



英単語習得の困難な生徒の支援

奥 村 安寿子*

Interventions for Students with Difficulties in Learning English Reading and Spelling

Yasuko OKUMURA

日本において英語は中学校の必修教科(外国語)であり、近年進学や就職に際して重視されるようになってきている。しかし、日本語の読み書きに困難がある生徒において、英語はより顕著な学習困難を伴うことが多い。英語における読み書き困難の出現率は10%に達する報告があるのに対し(e.g., Katusic, Colligan, Barbaresi, Schaid, & Jacobsen, 2001)、日本語では最も出現率が高い漢字でも約6%と報告されている(Uno, Wydell, Haruhara, Kaneko, Shinya, 2009)。そのため、日本語の読み書きに困難がある場合はもとより、日本語では目立った困難がなくても英語学習に困難を示す場合がある。従って、英語の学習困難に対する介入や配慮の必要性は高い。

日本語母語者における英語の読み書きの難しさは、英語表記の性質にも起因する。英語は日本語よりも細かい単位でことばの文字と音が対応し、例えば「ピアノ」は日本語では「ピ」「ア」「ノ」の3単位(3音節/3モーラ)だが、英語では「p」

「I」「æ」「n」「ou」5単位(5音素)になる(図1)。日本語母語者にとって「ピ」は「ピ」であり、「p・I」ではない。このような違いが英語の文字-音対応の理解を難しくする。難しさのもう1つの原因は、英語の文字-音対応の不規則さであり、例えば「ea」はspeak、head、great、ideaの4語で全て違う音になる。従って、個々のアルファベットと音の対応を覚えるだけでは、単語を十分に読み書きできない。

本報告では以上の点を踏まえ、読み書き困難のある中学生2名(A君、B君)に対して行った英語指導を紹介する。両生徒とも全般的な知的発達は正常域であったが、日本語の読み書きに困難があり、特殊音節を誤る、ひらがなやカタカナの想起に時間がかかる、漢字を覚えられないといった様子が見られていた。英語においては、アルファベット1文字の読み書きから困難を示し、単語の習得が進みにくかった。そのため、英語学習について支援の要望があり、毎週1回1時間半の個別指導を行うこととした。

学習支援開始前の両生徒の様子として、読みでは単語の形や特定の文字に依存することが多かった。そのため「hand」を「head」、「leaf」を「fire」と読む(fを手がかりとしたため)といった誤りが見られた。書きにおいては、「h」「d」「n」「a」を

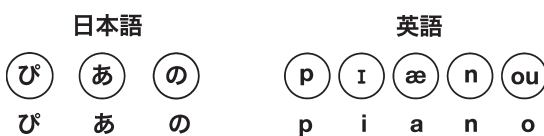


図1. 日本語と英語の文字-音対応

日本語は音節、英語は音素単位で対応する。

*北海道大学大学院教育学院博士後期課程

並べ替えて「hand」を作るよう求めると、「hnad」や「hdan」のような誤答があった。これらの誤りは、両生徒においてアルファベットと英語の音の対応関係がほとんど把握されていないことを示している。多くの生徒は、ローマ字などを手がかりに「何となく」対応関係を習得していくものと思われるが、この両生徒に対しては対応関係を明示的に指導し、それに基づく単語の読み書き方法を提示する必要があると考えられた。以下にその概要を紹介するが、指導法と結果の詳細は、奥村・室橋（2013）でも報告されている。

指導法 1：フォニックス

そこで、第1段階としてフォニックスの指導を行った。まず、アルファベットと音素を対応付けるため、「アルファベットの名前、音素、その音素で始まる単語」をセットにして口頭で繰り返した（図2）。この練習を、アルファベット26文字について行った。母音の文字は多くの音と対応するが、ここでは短母音のみを指導した。次に、読みの指

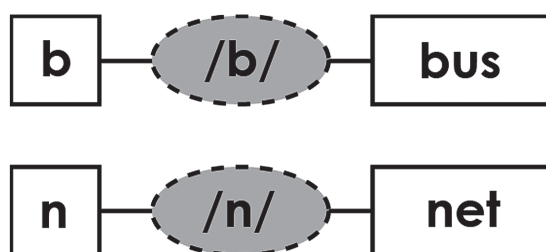


図2. 文字-音対応の指導方法

文字カードと単語カードを見ながら、アルファベット名、音素、その音素で始まる単語を言う。

導としてアルファベットを1文字ずつ音素に変換し、音素をつなげて単語の発音にする練習を行った。書きの指導としては、読み上げられた単語を書き取る練習をし、その際単語に含まれる音素に注意して聞くよう求めた。

フォニックスによる単語の読み書き方法が定着したところで、単語の読み時間と正確性を調べた。その結果、両生徒とも学習した文字-音対応を使って正しく単語を読むことが出来た（図3）。しかし読み時間に関しては、B君は単語を見てすぐに発音できたが、A君は全体的に時間がかかっていた。書きに関しては、読み上げられた単語を口頭で音素に分解し、それらをアルファベットに変換することで、正しく単語を綴ることが出来るようになった。例えば pink なら、「pink …/p/、/p/はピー。ピー…/i/、/i/はアイ（/p/、/I/は p と i にそれぞれ対応する音素）」のようにしていた。従ってフォニックスは、英語の文字-音対応の認識を形成し、それに基づく単語の読み書きを可能にする点で一定の効果があったと言える。

指導法 2：ライムを単位とした読み書き指導

フォニックスは英単語の読み書きの基礎形成には有効であったが、限界も示された。まず、A君においては練習を重ねても読みに時間がかかり、流暢性の向上があまり見られなかった。また、1文字ずつ音素に変換する方法は、長い単語には適用しにくいと考えられた。さらに、B君においてはフォニックスが定着するにつれて「sometime」

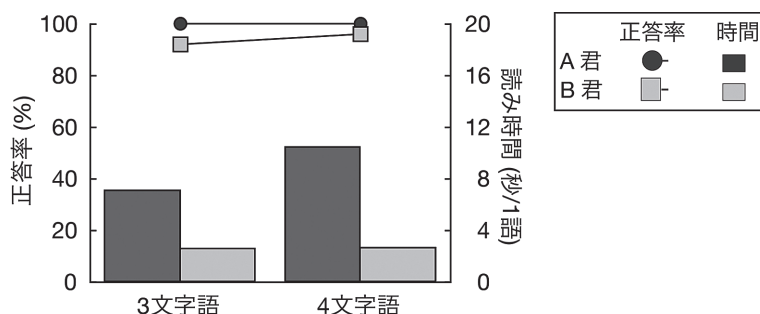


図3. フォニックス後の読みテストの結果

折れ線は正答率、棒は1語当たりの平均読み時間（正答時）を示す。3文字語は12語、4文字語は23語をテストした。

や「learn」のような単語を、1文字＝1音素の対応で読む誤りが見られるようになり、母音の読み書きについて更なる指導が必要であることが示された。しかし、英語の母音には非常に多数の文字-音対応が存在するため、それらをひとつひとつ学習するフォニックスでは非効率であると考えられた。

そこで、第2段階として英単語のライムを単位とした読み書き指導を行った。ライムは単語の母音と語尾子音を合わせた言語単位であり、例えばspeakのeakが相当する。ライムは通常3-4文字であり、フォニックスよりも大きなまとまりで単語を読むことが出来る。またライムは、母音の発音の手がかりになることが多いため、これを用いた指導を行うことで英単語の読み書き学習をさらに発展出来ると思われた。

指導には、母音が同じで語尾子音が異なるライムが横に、それらのライムが入った単語が縦に並んだ表を用いた(図4)。まず、図4の左上端のラ

ime	ine	ile	ike	ize
time	mine	file	like	size
lime	nine	tile	hike	
	sine	mile	bike	
	wine			
	line			
slime		smile	strike	

図4. ライムの表

長母音iを含むライム(太字部分、実際は色文字)が横に、そのライムを持つ単語が縦に並んでいる。

長母音 /ou/

one	ole	oke
tone	pole	coke
bone	hole	joke

長母音 /i:/

eed	eep	eek
need	deep	week
seed	keep	seek

長母音 /ei/

ake	ame	ase
make	name	case
take	same	base

長母音 /ɑ:/

ard	ark	arm
card	dark	arm
hard	mark	farm

図5. 様々なライムの表

イム「ake」は「エイク」と読むことを伝え、その頭に「m」をつけたら何になるかを生徒に尋ねた。「m」の音素はフォニックスで学習済みであったため、両生徒とも「メイク」と答えることが出来た。そして「t」なら「take」、「c」なら「cake」になることも分かり、縦に並んだ単語を全て読むことが出来た。次に、2番目のライム「ame」の読みを尋ねると、「k」を「m」の音に変えて「エイム」と答えることが出来た。このライムについても、語頭子音を変化させて「same」、「name」、「frame」などを読むことが出来た。このような表を様々なライムで作成し、同様の練習を行った(図5)。書きについては、子音を虫食いにした図6のようなプリントを作成し、読み上げた単語を書き取ってもらった。例えば「time」なら、「_i_e」の空欄に「t」と「m」を書き入れると正解となる。

ライムを単位とした読み書き方法が定着したところで単語の読み時間をテストしたところ、両生徒とも複数のライムについて正確に読むことが出来た(図7)。B君は読み時間が速く、A君は全体的に遅いという結果は同様であったが、A君もいくつかのライムではフォニックスよりも速く読めていた。従って、3-4文字をひとまとまりとして読むことは、流暢性の向上にある程度効果的だと言える。書きについては、単語を白紙に書き取っ

_ i _ e	_ ar _
_ i _ e	_ ar _
_ i _ e	_ ar _
_ i _ e	_ ar _
⋮	⋮

図6. ライムの書き練習に用いたプリント

左は長母音i、右は長母音arを含むライムの書き取り練習。空欄を子音で埋めると単語が完成する。

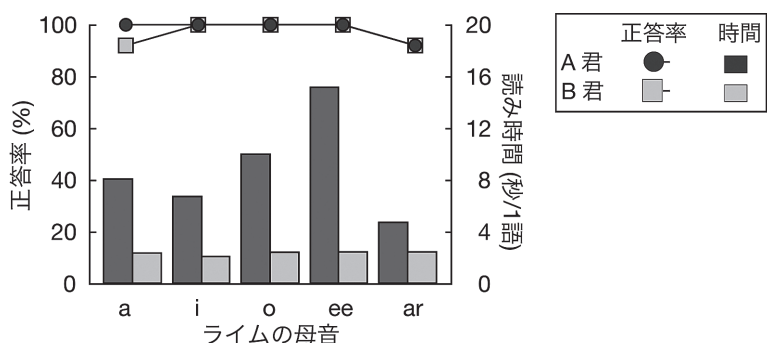


図7. ライムの学習後の読みテストの結果

折れ線は正答率、棒は1語当たりの平均読み時間(正答時)を示す。横軸はライムに含まれる母音である。単語例：a(make)、i(time)、o(home)、ee(need)、ar(card)。各ライムについて11-12語をテストした。

でもらったとき、ライムを手がかりにしたと思われる方略が示された。A君は「make」を書き取ったとき、最初に「m」と「k」を書き、次に「e」、最後に「a」を書いた。なぜその順序で書いたかを尋ねると、「エイクなので最後はeだと思ったけど、エイがどの文字かをすぐに思い出せなかった」と答えた。これは、「ake」というライムを単位として綴りと音が対応付けられていることを示唆している。このような方略を用いると、単語全体が想起出来なくても分かった部分から綴ることが出来るため、単語を書ける可能性が高くなると考えられる。

指導法のまとめと発展

フォニックスとライムの指導結果より、英語の文字／綴りと音を明示的に対応付け、それに基づいて単語を読み書きする方法は有効であったといえる。従って、まずフォニックスで1文字=1音の基本的な対応関係の定着を計り、次にライムを用いて母音の学習を進め、様々な単語の読み書きにつなげることを基本的な指導の流れとして提唱する。それにより、単語の読み書き学習を生徒自身の力で進めるための基礎が形成されることが考えられる。

このような指導法の発展として、読み書きに特異的な困難がある生徒だけでなく、様々な学習上の困難がある生徒への適用が挙げられる。その例

として、北海道大学土曜教室における取り組みを紹介する。C君(中学生、男児)は軽度知的障害を背景として、学習の様々な面に苦手さがあったが、英語においては音と文字の結びつきが分からないという問題があった。例えば、「How are you?」と言われたときに、その音声のどこまでが「how」かが分からなかった。一方、C君はパターン化された作業が得意であった。そこで、フォニックスにより読む時は1文字ずつ音に変える、書くときは1音ずつ文字と対応させる方法を指導すると、簡単な単語を正確に読み書き出来るようになった。D君(中学生、男児)は、単語を読んだり意味を理解したりすることは出来たが、単語の綴りが覚えられないと訴えていた。そこで教科書の予習をする際に、「it」、「and」、「sing」などのフォニックスで読める単語を取り上げ、各文字がどのような音と対応するかを示した。そして、単語を一音素ずつに区切りながら口頭で提示し、それを書き取るように求めると正しく書くことが出来た。本人も、フォニックスの方法だと単語が書け、覚えやすいと言っていた。

これらの事例より、英語の文字-音対応に基づく単語の読み書き指導は様々な特性を持った生徒に有効であると考えられる。D君の事例からはさらに、本格的な読み書き指導を行わずとも、補助的に取り入れることで単語の学習が進みやすくなる可能性が示唆された。英語の文字-音対応の明示的な指導は、英語の授業にはまださほど取り入れら

れていないのが現状だが、今後積極的に行われるようになることが望まれる。

小学校英語に向けて

平成23年度より、小学校5-6年生で外国語活動が必修化された。小学校の外国語活動は「聞く・話す」を中心としており、文字は補助的に用いることとされている。読み書きに困難のある生徒は、「聞く・話す」には問題がないこともあり、小学校の英語では困難が表面化しない可能性がある。しかし、中学校からは「読む・書く」が中心となるため、小学校の英語との乖離に注意する必要がある。

また、小学校英語における「聞く・話す」を通じて「読む・書く」の基礎スキルを形成することも可能である。例えば、単語を「聞く・話す」活動で、単語の音を使った遊びを取り入れることは音素やライムなどの意識付けに有効であると考えられる。具体的な遊びとしては、複数の単語の中から頭の音が仲間外れものを探す（例：cake、candy、carrot、apple）、単語を言いながら音素や

音節単位で手をたたき、語頭音とライムを足して言葉を作る（例：p「プ」とink「インク」で何になる？）などが挙げられる。これらを通じて形成された音素やライムの意識は、単語の読み書きの学習を促進すると考えられる。従って、小学校英語を中学校以降の英語学習（読み書き）の基礎形成の機会と捉え、それにつながる活動を導入するのも一案である。

引用文献

- Katusic, S., Colligan, R., Barbaresi, W., Schaid, D., Jacobsen, S. (2001). Incidence of Reading Disability in a Population-Based Birth Cohort, 1976-1982, Rochester, Minn. *Mayo Clinic Proceedings*, 76, 1081-1092.
- 奥村安寿子・室橋春光（2013）．フォニックスとライムのパターンを用いた英単語の読み書き指導法：読み書きに困難のある生徒2事例の指導経過より，LD研究，22，445-456.
- Uno, A., Wydell, T., Haruhara, N., Kaneko, M., & Shinya, N. (2009). Relationship between reading/writing skills and cognitive abilities among Japanese primary-school children: normal readers versus poor readers (dyslexics). *Reading and Writing*, 22, 755-789.